

B

書

評

K



『感染症大全 病理医だけが知っている ウイルス・細菌・寄生虫のはなし』

著者

つつみ病理診断科クリニック院長

堤 寛

病理医は病理診断なりわいを生業にする。その病理診断の主な対象はがんである。患者さんから採取された細胞や組織を顕微鏡で診て、がんか否かを判別して臨床医に伝える。それで治療方針が決定するから、病理診断は「最後の診断」であり、それが患者さんを救う(と、病理医は信じている)。

そんな病理医には、感染症の診断を苦手とする者が多いようだ。それは「この組織が何の感染症なのか診断してくれ」という依頼がほとんどないからだろう。その中で、堤氏は感染症が専門と名乗る稀有な病理医である。日本病理学会総会で感染症に関する診断講習会の講師を何度も(ほとんど定期的に)務められているが、いつも会場は立ち見どころか中に入れない者が出るほど、人で溢れている。講演は面白く、聞き終えた時には自分も感染症の病理に強くなったと思わせてくれる。ところがしばらくして、がんと紛らわしい炎症と思われる組織などが提出されると「一体これは何なのだ!?!」になっている。かく言う私も「訳の解らない感染症?」の標本を堤氏に送って、ご高診を仰いだことが何度もある。まさしく困った時の「つつみ頼り」で、病理医の中には彼のファンがとても多い。それは診断能力だけでなく、堤氏のもつカリスマ性のためでもある。

その堤氏が、感染症の病理の本を書かれた。その内容はまさしく感染症の「病理学」である。病原となった微生物や病巣の病理所見の特徴をならべたてても、病理学にはならない。感染の背景や原因、種々の臓器に及ぼす影響、その結果としての症状など、患者さんに起きている病態生理を紐解き、なぜそのような病理像を呈しているのかまで明らかにすることこそが、病理学なのだ。

大全と銘打つだけあってさまざまな病原体による感染症について、歴史から症状、治療まで全てを網羅している。ただし、どの頁もインターネットで探せばみつかるとはならず、ご自身の豊富な経験と知識を基にした「秘話」や「解説」である。特筆すべきは、堤氏が経験された症例の話が数多く含まれていることだろう。そのような逸話は病理診断を経験していれば書けるといふものではない。なぜなら、病理医は標本を相手に「病理診断」をしても、患者さん自身のことはほとんど知らないのが普通だからだ。感染症の感染源の特定や感染拡大防止も、通常は臨床医に委ねている。日本感染症学会の感染管理医師の資格をもち、「患者さんから顔の見える病理医」として「病氣」ではなく「病人」を診てきた堤氏だからこそ書けた内容なのである。

病理を知らなくても、感染症に関する基礎知識がなくても、この本が面白くないはずがない。「へえ、そうなんだ」と面白おかしく読み終えた時に、いつの間にか感染症に関する知識が増えている。そしてその知識が「知識のワクチン」(本文中より)として読者を感染から守ることにつながるのだ。そんな「つつみマジック」を、あなたも味わってみてはいかがだろうか?

東京通信病院病理診断科・日本医科大学病理学教室

田村浩一

発行：株式会社 飛鳥新社 〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-3 光文恒産ビル 2F

定価：本体 1,636 円 + 税